

特集「エジプト政変と東南アジア」にあたって ——新しいイスラム世界認識の夜明け——

西芳実

チュニジアの「ジャスミン革命」に始まり、エジプト政変へと発展した中東地域の政治情勢の流動化は、今後の世界のあり方を確実に変えるものである。中東地域は長らく民主化の波から取り残された地域と見られてきたが、中東は特殊で権威主義体制はなくならないとの認識はいまや過去のものとなった。街頭に出て政権批判を行う人びとの動きが一国を越えて及んでいく様は、「革命」が地域全体の秩序や規範を変えていく可能性を感じさせる。

かつてフセイン政権下のイラクに対して空爆を実施した国際社会は、その後のイラクに安定的な民主化がもたらされなかったことを見ていたはずだが、政権転覆を恐れて一般市民に対する武力行使を辞さないリビアのカダフィ政権に対して空爆に踏み切った。中東情勢の変化とそれへの対応は、これまでも何度か世界秩序の再編のきっかけをつくってきた。現在、中東で起こっていることは、中東地域だけの問題ではなく、現代世界の全体にかかわる問題である。では、これらの動きは東南アジア地域にどのような影響を及ぼすのだろうか。

東南アジアは中東と歴史的なつながりをもつ地域である。本特集で國谷徹が述べるように、東南アジアのイスラム教徒にとって中東は聖地メッカやイスラム学の権威アズハル大学がある地である。

9.11 事件以降は、国境を越えて広がるイスラム・ネットワークやイスラム世界秩序に関心が寄せられるなかで、中東と東南アジアの結びつきはいっそう注目されるようになった。中東と東南アジアはともに

イスラム・ネットワークによって結ばれたイスラム世界の中に位置づけられた。イスラム世界の中心は中東であり、周縁たる東南アジアは中東のイスラム教徒の動向の影響を受ける、いわば風下の存在として注目された。

本特集では、エジプト政変が東南アジアでどのように受け止められているかをマレーシア、インドネシアの両国について様々な角度から論じた論考を6本集めた。これらの論考から伺えるのは、中東情勢の影響は宗教上のものであるというより政治・経済上のものであるということである。

東南アジアの人々にとって、今や中東世界は教えを請う対象から自分たちの呈示するモデルが流通しうる場所へと変わりつつあるように見える。あるシンポジウムで、海外駐在経験の長い社会人参加者が「イスラム国家の中でもっとも民主化されているのはマレーシアだ」と発言するのを聞いた。このことは、イスラム世界の外ではイスラム世界の手本は東南アジアにあるとの認識があることを意味している。インドネシアのユドヨノ大統領も、イスラム教徒の住民が多数派を占める国家で穏健な形の民主化が達成され、その後も安定的な政治状況が続くインドネシアは中東の民主化のモデルとなりうると発言している。ユドヨノ大統領は以前にもイスラム映画の発信地としてのインドネシアというアピールをしたことがある。マレーシアのイスラム国際大学設置なども考え合わせれば、東南アジアをもってイスラム世界の発信地とするあり方がますます強められて

いるように見える。

このように、中東の民主化をめぐる動きは、中東と東南アジアの結びつきを考える上で、これまで論じ得なかった事柄を検討する機会をひらいている。本誌が本特集を企画したゆえんである。本特集では、中東政変が東南アジアに飛び火するのかもしれないのかという問いに答えるのではなく、むしろ、中東政変を通じた中東と東南アジアの結びつけ方の再考をめざしている。

中東の動向はマレーシアにどのような影響を及ぼしているか。鈴木絢女は、マレーシアの関心は野党もしくは反政府勢力の運動がどこまで成功するかに向けられているとする。また、福島康博は、マレーシアの地域開発計画に中東湾岸諸国からの投資が重要な資金源として想定されており、資金提供国の政情不安として関心が向けられているとする。

インドネシアにおける中東イメージを考察した見市建は、インドネシア社会が中東の動向に対して距離を持って他者として観察していることを指摘する。また、植民地統治下の東南アジアと中東との結びつきについてまとめた國谷は、東南アジアの人々が中東から近代化とイスラム教の折り合いのつけ方を学ぼうとしていた点に注目している。

このように、現代の中東と東南アジアを密接に結びつけているのは、経済関係であったり、統治体制の類似性であったりする。

今回の中東政変の特徴の一つは、宗教が争点となったり、宗教組織が表舞台に出てきたりしていないことである。そこでは、貧しい民衆が宗教組織に結集して政権を打倒するという古典的な革命像

が問われている。中東研究者の多くが今回の政治変動を予測できなかった理由として、革命が組織的な動員によって実現したのではなく、携帯電話やインターネットといった情報通信技術の発達が決定的な役割を果たしたことが指摘されている。ツイッターやフェイスブックを通じてばらばらの個人が結びつけられて広場に参集し、それが大きなアピールとなったところから、「ネット革命」という言葉も生まれた。しかし、多くの論者が指摘するように、ネットは道具でしかない。伊賀司はマレーシアの経験を踏まえて、ネットが反政府運動のツールとなりうるのは、オフィシャルなメディアの規制が強い状況下でネットが代替メディアとして機能する限りにおいてであると指摘している。また、増原綾子は、政変の成否は大衆動員力にではなく軍や政治エリートの判断とその調整力にあることをインドネシアの経験から指摘している。

ネット革命の意義を考えるとすれば、国境を越えて互いの様子を観察し、参照し、披露しあう状況を支えていることが挙げられるだろう。ネットを利用する中東の人々の姿は、長い衣に象徴されるイスラム教やアラブといった記号に覆い隠された中東の人々の生身の姿を想像させるものだった。

中東政変は、中東の人々を理解するのにイスラム要素の理解を深めるだけでは不十分であることを改めて確認させるものだった。このことは、中東と東南アジアの結びつきを理解する上でも同様である。中東を中心とし、東南アジアを周縁とする世界観では理解できない結びつきが重要であることが、今回の政変の影響を見ることで明らかになったように思う。